イベント情報 **event**

詳しくは、ウェブサイトをチェックしてください。

信玄公祭り「輝きの祭典」大宝飾展

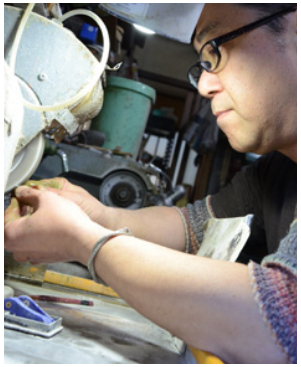
※写真はイメージです。

日本一のジュエリー産地甲府で、県内を代表する宝飾品メーカーが一堂に会して行われる展示販売会。会場を埋め尽くすジュエリーはどれも逸品です。会場では抽選会等多数の催しが行われます。これに合わせて当館でもイベントを企画中ですので、お楽しみに!

日時：平成29年4月8日（土）　10：00～19：00
場所：山梨県庁防災新館１階　やまなしプラザ

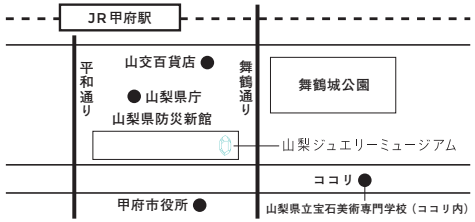
「Designer-Craftsman Jewelry」第３弾５月に登場！

好評をいただいておりますワンランク上の体験「Designer-Craftsman Jewelry」に新たな体験が加わります。第3弾はKoo-fuデザイナー飯島恵子氏のアイデアを、宝石研磨職人 深澤陽一氏と貴金属加工職人 古屋知宏氏が形にします。現在デザイン案を元に魅力的な体験となるよう検討を重ねています。ご期待ください。



山梨ジュエリーミュージアム
Yamanashi Jewelry Museum

開館時間：午前10時～午後5時30分（最終入館は、午後5時まで）
休館日：火曜日（祝日の場合は、その翌日）、年末年始
※その他臨時に開館・休館することがございます。
入館料：無料　駐車場：92台（山梨県防災新館地下有料駐車場、来館者は1時間無料）
〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1-6-1 山梨県防災新館1階（山梨県庁内）
http://www.pref.yamanashi.jp/yjm/



cj

craftsman jewelry

2017
February

Vol.9

2017年２月発行

伝統工芸士

河野 誠

craftsman jewelry file.009 Makoto Kohno

石の中に見る景色と、様式美の追求。

工房の前で、伝統工芸士である河野誠氏が出迎えてくれた。中へと案内してくれた河野氏は黒いコートに身を包み、一見独特な雰囲気に圧倒されるが、話をしてみると穏やかで、繊細な印象を受ける。静かに、淡々と貴石彫刻への想いと仕事について語ってくれた。

伝統工芸士とは、経済産業省指定の伝統的な工芸品を生み出す職人のこと。伝統工芸品、並びに、伝統工芸士は一定の基準を満たした上で、厳正な審査の末に認可される国家資格である。認定を受けた工芸品、工芸士が全国各地、さまざまに分布する。山梨では、「甲州印伝」や「甲州手彫印章」という手作りのハンコがあり、河野氏は甲府に代々受け継がれてきた「甲州水晶貴石細工」の伝統工芸士だ。水晶、翡翠（ひすい）、瑪瑙（めのう）などの貴石を用いて、原石から磨き、作品をつくりあげる。彫像や数珠といった神仏具から、お椀やグラスまで、水晶の産地として隆盛した甲府ならではの工芸品だ。いわく、「石のなりたがっている姿」へと変貌させるのである。

河野氏が職人として敬愛する師であり父、道一（みちひと）さんの言葉を借りてそう言った。主に手掛けているのは茶を愉しむお腕。ごつごつとした原石ひとつから作られたとは思えないほどに滑らかだ。荒々しかった石の表情は静寂の様相を呈している。石のなりたがっている姿への昇華とはこういうことかと納得した。

祖父の代から続くという、河野水晶美術は父、叔父、兄が在籍している。しかし、自身が工房に入り、伝統工芸士になるとは思っていなかったという。貴石細工は日常の風景、特に意識したことはなかったと当時を振り返る。宝飾専攻のヒコ・ミズノジュエリーカレッジにて、一通り知識、技術を学び、卒業後は山梨県のジュエリー販売会社で企画営業に携わった。当時は贅沢品であれ、作れば売れる時代だ。ジュエリーを大量生産し売ることが当たり前だった。幼き頃より、美術品としての宝飾、そして大量生産されるプロダクトとしての宝飾、その両面を見てきた河野氏は、ある日祖父の作品を再び目にする。そのとき、一点物の作品を作りたいと心に浮かんだのだ。「作品を見たときに祖父の人柄が伝わってきたんですよね。自分もそんな作品を生み出したいと自然と思えたのです」。自身の作品を手に、まじまじと見つめながら言った。ジュエリー会社での仕事は順調だったが、家族のもとで伝統工芸士の道を進むことを選んだ。伝統工芸士の資格は制作するものによって、所属する自治体、組合によってもまちまちだが、貴石細工の場合は10年以上の実務経験を要する。父や兄、叔父たちは家族であり師匠、先輩たち。指摘やアドバイスをもらいながら、腕を磨いた。当然、プレッシャーや焦りを感じることもある。しかし、恵まれていると河野氏は感謝の念を口にする。

河野氏はあえて、綺麗な状態のいい石を選ばない。本来は使わないような、キズや割れのある石を選び、作品の個性として活かしている。邪道という人もいるかもしれない。しかし、それは父親ゆずりの大切にしたいスタイルなのだ。磨くうちに、石の中に、自然の情景を見出す。石には、土地の膨大な歴史情報が結晶化して詰まっている。石の見てきた、またはその身に刻んだ、悠久の景色を今再び作品として表現しているのだ。月夜に雲がかかる様をイメージソースに制作した「兆（きざし）」は近年の作品でも出来がいいと喜ぶ。石の割れを活かし、漆黒に染めた貴石の艶は月光に照らされた夜の空を思わせる。

今はまだ、自身の腕を研鑽している最中だと謙遜するが、後々には後進の育成にも役立ちたいと語る。家業だからこそ、機材や工房もある。しかし、家業でなくとも伝統工芸士を目指したい若者もいるそうだ。伝統工芸は伝えていかなければ途絶えてしまう。「近くに師がいて、兄からは刺激をもらっています。プレッシャーはありますが、環境的には恵まれている。だからこそ、若い世代の役に立ちたいと考えています」。貴石彫刻に情熱を注ぐ、河野氏は未来を見据える。伝統工芸の定義の中に、暮らしに豊かさを与えるものといった文言がある。美術品として大切に飾っておくのも一興であるが、河野氏は実際に使ってもらいたいと願う。一輪挿し、ぐい呑み、お椀、見た目の美しさだけでなく、手で持ったときの重みや感触までを想像しながら制作をしている。「作品に価値をつけてくれた人から、使ってるよと言ってもらえることがいちばん嬉しいですね。」自身の作品が茶や花など日本の伝統文化の中に生き、その一端を担うことができればと、河野氏は石と向き合う。目指すのは様の美の追究である。

河野誠
伝統工芸士。1997年より父と兄、叔父が在籍する河野水晶美術に従事し、お椀や一輪挿しといった貴石彫刻作品を制作。山梨県水晶美術彫刻新作展にて瑪瑙茶碗「斜陽」が山梨県産業労働部長賞入賞。近年では2年連続で最高賞である知事賞を受賞している。

河野 誠氏による実演及び体験指導

3月11日

平成29年3月11日（土）に河野誠氏による水晶美術彫刻の実演及び体験指導が実施されます。お気軽にお立ち寄りください。